

平成30年度農作物病害虫発生予察情報

発生予報 第2号（5月予報）

発表日：平成30年4月25日

岩手県病害虫防除所

I 情報の要点

1 水稲

- ◎ **育苗期の細菌病類はやや多の予報**です。引き続き適切な温度・水管理を心がけましょう。また、プール育苗において中途半端な湛水深は、病害発生の原因となりますので注意してください。

2 麦

- ◎ **赤かび病はやや多の予報**です。赤かび粒および毒素の混入を防止するため、抵抗性「やや弱」の品種「ゆきちから」では開花期と開花7～10日の2回、薬剤防除を実施しましょう。また、その後も降雨が続く場合は追加防除を実施しましょう。

3 りんご

- ◎ **果樹カメムシ類はやや多の予報**です。越冬成虫の飛来は落花期前後から多くなるので、この時期から特に注意して観察しましょう。

4 ねぎ

- ◎ **ネギコガはやや多の予報**です。第1世代のふ化が認められているので、圃場の観察に努め、幼虫による加害がみられる場合には薬剤防除を実施しましょう。

5 りんどう

- ◎ **リンドウホソハマキの発生時期はやや早い予報**です。今後発行する情報を参考としながら、適期防除に努めましょう。

II 農薬の安全使用

- 1 農薬の使用にあたっては、他作物や周辺環境に影響が及ばないように十分配慮し、対策を講じましょう。
- 2 水稲育苗ハウスで後作に野菜等を栽培する場合は、農薬が土壌に残留しないよう、箱施用剤の処理をハウス外で行うか、ハウス内では無孔のビニールシートを使用するなどの対策をとりましょう。

【利用上の注意】

本資料に掲載した農薬は、平成30年4月11日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

- ・農薬は、使用前に必ずラベルを確認し、使用者が責任を持って使用しましょう。
- ・農薬使用の際には、(1)使用基準の遵守(2)飛散防止(3)防除実績の記帳を徹底しましょう。

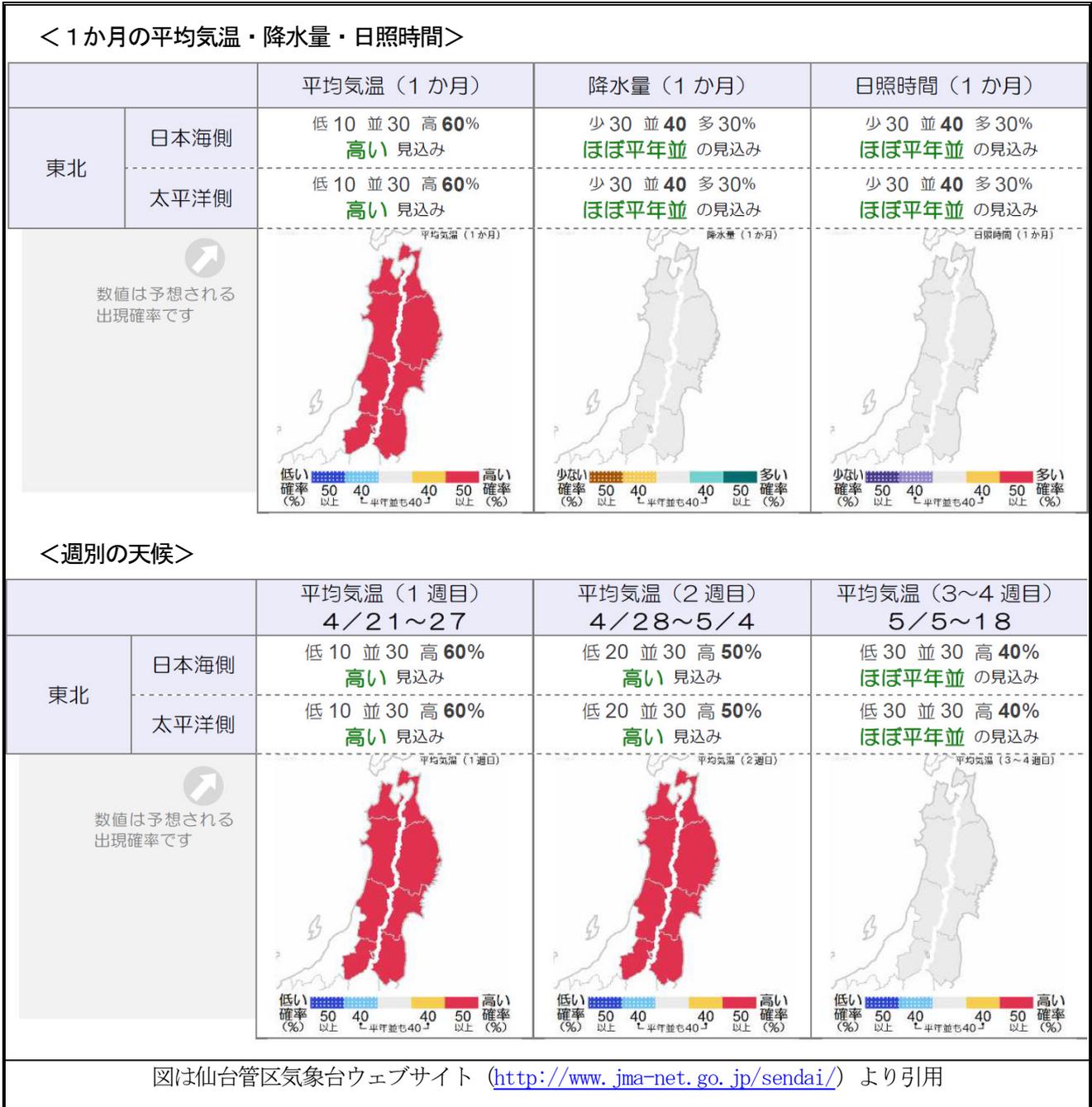
【情報のお問い合わせは病害虫防除所まで】 TEL 0197(68)4427 FAX 0197(68)4316

☆この情報は、いわてアグリベンチャーネット(<http://i-agri.net/Index>)でもご覧いただけます。

Ⅲ 1ヶ月予報（4月21日～5月20日、仙台管区气象台、4月19日発表）

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

- 1週目（4/21～27） 期間のはじめは晴れますが、その後は曇りで雨の降る日があるでしょう。
- 2週目（4/28～5/4） 東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多い見込みです。
- 3週目（5/5～18） 東北太平洋側では平年と同様に晴れの日が多い見込みです。



水稻病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
細菌病類 (もみ枯細菌病) (苗立枯細菌病)	(育苗期)	やや多	(1) 育苗施設の巡回調査(4/18~20)では、発生は確認されなかった。(±) (2) 効果のある種子消毒剤が広域で使用されている。(±) (3) 向こう1ヶ月(4/21~5/20)の気温は、平年より高い予報。(±)
苗立枯病 (ムレ苗含む)	(育苗期)	やや少	(1) 育苗施設の巡回調査(4/18~20)では、発生量は少なかった。(±) (2) 苗立枯病を対象とした防除が省略されている。(±) (3) 向こう1ヶ月(4/21~5/20)の気温は、平年より高い予報。(±)
ばか苗病	(育苗期)	並	(1) 前年の本田での発生量は平年並。(±) (2) 育苗施設の巡回調査(4/18~20)では、発生は少なかった。(±) (3) 効果のある種子消毒剤が広域で使用されている。(±)
いもち病	(育苗期)	並	(1) 前年の穂いもちの発生量は平年並であることから、罹病わら・粃殻等の伝染源量も平年並にあると考えられる。(±) (2) 効果のある種子消毒剤が広域で使用されている。(±)

記号の説明 (++):重要な多発要因、(+):多発要因、(±):並発要因、(-):少発要因、(- -):重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- 育苗期の病害対策として、適切な温度・水管理を心がける。
- プール育苗における中途半端な湛水深は、病害発生の原因となるので注意する。湛水深は2葉目が出始めたら培土表面より上となるよう管理し、ひたひた水となることは避ける。

【細菌病類】

- 緑化～硬化期の高温(30℃以上)は発生を助長するので、適正な温度管理に努める。
- 発病苗はすぐに処分し、本田に移植しない。

【苗立枯病】

- ハウス内温度が低く、乾燥や多湿が繰り返されると発病が助長されるので、特に夜間のハウス内温度に注意するとともに、過かん水を避ける。

<苗立枯病の発生しやすい条件>

- ピシウム属菌(ムレ苗):育苗期間中の低温(4℃以下)、pH5.5以上の床土、池・河川水の利用
- フザリウム属菌:低温による生育停滞、過かん水と過湿(プール育苗での低水位も該当)
- トリコデルマ属菌(青カビ):高温条件下(30℃前後)で生育旺盛、pH5.0以下・乾きやすい床土

【ばか苗病】

- 育苗中の発病苗は抜き取り、焼却するか土中に埋める。

【いもち病】

- 覆土をていねいにおこない、粃を露出させない。かん水等で露出した粃にも注意する。
- 稲わら・粃殻は伝染源になるので、育苗施設内やその周辺に放置しない。
- 例年早期発生・多発生する地域において、生物農薬による種子消毒を実施した場合には、育苗期防除(薬剤かん注処理)を実施する。

3 防除上の留意事項

- 箱施用剤は使用基準(使用時期、1箱当り処理量)を遵守するとともに、育苗箱に均一に処理する。
- 育苗期防除を実施する際は、生物農薬と併用できない薬剤があるので注意すること。

水稻虫害

1 予報（5月）の内容

病虫害名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
イネミズゾウムシ	本田侵入盛期並	やや少	(1) 向こう1ヶ月(4/21~5/20)の気温は、平年より高い予報。 (2) 前年の発生量は、平年よりやや少なかった。(－)
イネドロオイムシ	本田飛来時期やや早	並	(1) 向こう1ヶ月(4/21~5/20)の気温は、平年より高い予報。 (2) 前年の発生量は、平年並であった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ】

- (1) 両害虫ともに、前年箱施用剤による一斉防除を行った地域、および前年少発生の地域では、防除は不要である。
- (2) 前年に多発した圃場では、移植時に箱施用剤による防除を行うか、イネミズゾウムシでは成虫侵入盛期、イネドロオイムシでは産卵盛期に発生状況を調査し、防除要否を判断する(表1)。
- (3) 薬剤防除を実施しない場合は、前述の時期に同様の調査を行い、翌年の防除要否を判断する(表1)。

表1 イネミズゾウムシ、イネドロオイムシの防除要否判定基準(平年の場合)

病虫害名	判定および防除時期	判定方法	当年の要防除水準	翌年の要防除水準
イネミズゾウムシ	成虫本田侵入盛期	畦畔から2m程の場所から水田中心に向かって連続25株調査(水面下の株元まで見る)	成虫数	成虫数
	県中、南部：5月下旬～6月上旬 県北、山間部：6月中旬		8頭以上/25株	3頭以上/25株
イネドロオイムシ	産卵盛期	連続25株調査(水面下の株元まで見る)	卵塊数	卵塊数
	県中、南部：6月上旬 県北、山間部：6月中旬		13卵塊以上/25株	3卵塊以上/25株

【斑点米カメムシ類】

- (1) アカスジカスミカメ越冬世代幼虫のふ化盛期に合わせて、地域一斉に増殖場所である水田畦畔、水田周辺の牧草地、雑草地、農道の草刈りを行う。その後もイネ科植物が出穂しないような管理を心がける。
- (2) 草刈りの実施適期は、平年、県中南部が6月上旬、県北、山間部は6月中旬であるが、気象経過により変動するため、防除速報(5月20日頃発行予定)を参考にすること。

麦病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
うどんこ病	—	少	(1) 前年の発生量は、平年並に少なかった。(—) (2) 耐病性の強い品種が、広く作付けされている。(—) (3) 向う1ヶ月(4/21~5/20)の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
赤かび病	やや早	やや多	(1) 向う1ヶ月(4/21~5/20)の気温は平年より高い予報であり、出穂期が早まる見込み。 (2) 前年の発生量は、平年より多かった(+)。 (3) 赤かび病抵抗性「やや弱」品種(ゆきちから)の作付けが増加している(+)。 (4) 向う1ヶ月(4/21~5/20)の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
赤さび病	—	やや少	(1) 前年の発生量は、平年よりやや少なかった。(—) (2) 向う1ヶ月(4/21~5/20)の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)

記号の説明 (++) : 重要な多発要因、(+) : 多発要因、(±) : 並発要因、(—) : 少発要因、(—) : 重要な少発要因

2 防除のポイント

【うどんこ病】

- (1) 前年及び既に発生が見られた圃場では、防除を実施する。
- (2) 防除時期の目安は、穂ばらみ期及びその7~10日後である。

【赤かび病】

- (1) 赤かび病菌は、開花した穂に感染する。このため、開花期の防除が最も効果的である。ナンブコムギ、銀河のちからは、開花期の1回防除で効果が得られる。ゆきちからは、開花期と開花7~10日後の2回防除が必要である(表1)。
- (2) 開花期以降に曇雨天が続く場合、ナンブコムギ、銀河のちからは1回目散布の7~10日後に、ゆきちからは2回目散布のさらに7~10日後に、追加防除を実施する(表1)。

表1 小麦主要品種の防除適期

品種名	赤かび病抵抗性	防除適期		
		開花期 (1回目散布)	1回目散布の7~10日後 (2回目散布)	2回目散布の7~10日後
ナンブコムギ 銀河のちから	中	必須	状況に応じて追加散布	—
ゆきちから	やや弱	必須	必須	状況に応じて追加散布

【赤さび病】

- (1) 前年及び既に発生が見られた圃場では、防除を実施する。
- (2) 防除適期は、発病が見られた時、及びその7~10日後である。
- (3) 下葉からまん延するので、下葉にも十分薬液がつくように散布する。

3 防除上の留意事項

- (1) 同一薬剤の連用又は同系薬剤の連用は、耐性菌の生じる恐れがあるので、効果の高い薬剤を輪番で使用する。

りんご病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
モニリア病 (実ぐされ)	早	並	(1) りんごの生育は、平年よりも早い。 (2) 前年の巡回調査において、一部の園地で発生が確認された。(±)
黒星病	—	並 (平年少発生)	(1) 前年の巡回調査において、一部の園地で発生が確認されたが、近年発生が少なく、越冬伝染源量は少ない。(—) (2) 向こう1ヶ月(4/21～5/20)の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(±)
赤星病	—	やや少	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(—)
うどんこ病	—	並 (平年少発生)	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(—)
斑点落葉病	やや早	やや多	(1) りんごの生育は、平年よりも早い。 (2) 向こう1ヶ月(4/21～5/20)の気温は平年より高く、降水量はほぼ平年並の予報。(＋)
腐らん病	—	並	(1) 4月中下旬の巡回調査では、発生園地率は平年並であった。(±) (2) 前年の巡回調査において、発生園地率は平年並であった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(—)：少発要因、(—)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

- 5～6月は、斑点落葉病や褐斑病をはじめとする多くの病害の防除適期である。防除薬剤の散布間隔が空きすぎないように注意するとともに、降雨前の予防散布を心がける。
- りんごの生育がかなり早まっているので、落花期以降の散布スケジュール（特別散布等）の検討を行う。

【モニリア病】

- 近年本病が発生した園地では、園地を良く確認し、葉ぐされや実ぐされを見つけしだい摘み取る。開花直前散布までに葉ぐされを見つけた場合は、直ちにアンビルフロアブル又はオンリーワンフロアブルを散布し、葉ぐされの病斑拡大（花ぐされ）を防ぐ。
- 実ぐされの発生が心配される園地では、満開時にトップジンM水和剤を特別散布する。なお、ミツバチを導入している園地では散布前に巣箱を撤去する。

【黒星病・赤星病・うどんこ病】

- 開花直前のE B I剤散布により防除することができる。開花期間中降雨が続く場合や、前年黒星病の発生がみられた園地では、落花期にもE B I剤を散布する。

【斑点落葉病・褐斑病・黒点病】

- 例年問題となる病害に合わせて、落花期～落花30日頃（幼果期）までの定期散布剤を選択する。

【腐らん病】

- 罹病枝は開花期頃が最も発見しやすいので、園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努める。
- 腐らん病は、発生樹に隣接する樹に次年度も発生する傾向があるので、特に発病歴のある樹およびその隣接樹は注意して観察する。
- 枝腐らんや胴腐らんは見つけ次第、剪除や削り取りを行い、切り口や削り取り部に薬剤を塗布する。6月以降、病患部からの孢子飛散が多くなるので、遅くとも5月中には処置を完了する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さないよう処分を徹底する。

りんご虫害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	やや早	並	(1) 基準圃場のミダレカクモンハマキのふ化時期は、平年よりやや早い。 (2) 4月中下旬の巡回調査での発生は、確認されなかった。(－) (3) 向こう1ヶ月(4/21～5/20)の気温は、平年より高い予報。(＋)
リンゴハダニ	やや早	やや多	(1) 基準圃場のふ化開始時期は、ほぼ平年並。(±) (2) 3月下旬から4月上旬の巡回調査での越冬卵の寄生園地率は、平年並だった。(±) (3) 向こう1ヶ月(4/21～5/20)の気温は、平年より高い予報。(＋)
ナミハダニ	－	並	(1) 4月中下旬の巡回調査での発生園地率は、花叢葉、下草ともに平年より低かった。(－) (2) 向こう1ヶ月(4/21～5/20)の気温は、平年より高い予報。(＋)
果樹カメムシ類	－	やや多	(1) クサギカメムシの越冬量調査では、越冬量は例年より多い。(＋) (2) 本年のスギ・ヒノキの花粉飛散量(実測)は、例年よりやや多い。(±)

記号の説明 (++):重要な多発要因、(+):多発要因、(±):並発要因、(－):少発要因、(－):重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類】

- (1) 落花期にハマキムシ類、アブラムシ類等を対象に有機リン剤を散布する。
- (2) 訪花昆虫導入園では、それらに影響のないIGR剤やBT剤、ジアミド剤を用いる。

【ハダニ類】

- (1) リンゴハダニの発生が多い園地では、落花期にサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤、バロックフロアブルで防除を行う。なお、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布は、ナミハダニにも有効であることから、ナミハダニが花叢葉に見られた場合、こちらを選択する。

【果樹カメムシ類】

- (1) 越冬成虫の飛来は、落花期前後から見られることが多い。今年は越冬量が多い地域もあるので、例年発生の見られる園地では、この時期以降特に注意して観察を行う。
- (2) 飛来観察は、果実が餌となる周辺部の樹木(サクラ、クワ、キリ等)や防風ネット等も併せて随時行う。
- (3) 大量の飛来が確認された場合は、ただちに効果の高い薬剤を特別散布する。
- (4) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

【モモチョッキリゾウムシ】

- (1) 前年被害が目立った園地での落花期の防除薬剤は、効果の高い合成ピレスロイド剤を選択する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。
- (2) サンマイト水和剤は、マメコバチに対して影響があるので注意する。

ねぎ

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ネギコガ	第1世代成虫早	やや多	(1) 越冬ねぎ圃場における第1世代のふ化時期は、平年より早かった。 (2) 前年秋期の発生量は、平年より多かった。(+) (3) 向こう1ヶ月(4/21~5/20)の気温は、平年より高い予報。(+)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ネギコガ】

- (1) 第1世代のふ化が認められているので、圃場の観察に努め、幼虫による加害が見られる場合には有機リン剤等を散布し、防除する。
- (2) 有効積算温度から推測される第1世代成虫の羽化始期は、県中南部では5月下旬~6月上旬、県北部では6月上旬~中旬と推察される。
- (3) 合成ピレスロイド剤は成虫の羽化盛期前~盛期、有機リン剤は羽化盛期~盛期後の散布で効果が高い（平成10年度試験研究成果参照）。

りんどう

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
リンドウ ホソハマキ	やや早	やや少	(1) 向こう1ヶ月(4/21~5/20)の気温は、平年より高い予報。 (2) 前年秋期の発生量は平年より少なかった。(一)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【リンドウホソハマキ】

- (1) まだ残茎が見られる圃場では、越冬世代成虫発生時期（県中南部で平年5月下旬から）までに残茎処理を徹底する。処理の際は、できるだけ根元（地際部）まで残さないようにする。また、集めた残茎を圃場内に放置すると発生源になるので適切に処理する。
- (2) 越冬世代羽化盛期は年次によって前後することから、防除時期については今後の情報を参考にする。
- (3) 重点防除対象は第1世代の卵、幼虫であるので、成虫または食害痕（図1、2）が認められたら薬剤を散布する。
- (4) フェニックス顆粒水和剤およびディアナS Cは、越冬世代羽化盛期とその10日後の2回散布すると効果が高い（平成26年度試験研究成果参照）。
- (5) 前年、アディオフロアブルを使用しても被害が目立つ圃場では、上記薬剤によって防除する。
- (6) 産卵の大部分は葉裏に行われるので、下位葉の葉裏までしっかり薬剤がかかるよう、丁寧に散布する。
- (7) 茎部に食入後の幼虫は薬剤防除が難しいため、生長部の被害（図2、3）を見つけたら折り取り、土中に埋めるなどして処分する。



図1 潜葉痕



図2 生長部の食害痕



図3 生長部の被害